



No. 168

ティークレイク

Tea Break

怪談「雪女」

会員 三宅 正夫

「雪女」とは雪の深い夜に雪の精が化して現れるという白い衣を着、白い顔をした女の妖怪で、雪女郎、雪おんば、雪降り婆等、色々呼名がある（日本大百科全集）。地方によって様々の伝説があろうが、「雪女」として人口に膾炙しているのは小泉八雲の「怪談」に紹介されている武蔵の国のものであろう。その話を要約すれば、茂作と巳之吉という2人の樵が、或るとても寒い日暮時、家路につこうとして激しい吹雪に見舞われ、2人は渡し守の小屋に身を寄せた。年老いた茂作は忽ち眠りにつき、若い巳之吉もいつの間にか眠りについた。顔に吹き付ける雪で巳之吉が目を覚ましたところ、閉めた筈の小屋の戸が開いており、白づくめの女が眠っている茂作にかがみ込んで息を吹きかけていた。女は振り返るや巳之吉に覆いかぶさり、「お前もあの年寄りのようにしてやろうと思ったが、お前は若いし今は許してやる。しかしお前が今夜見たことを喋ったら命はないものと思え」と言うので戸口から出て行った。茂作は凍りついたまま、死んでいた。夜が明けた時には吹雪は去っており、小屋にやって来た渡し守は茂作の骸の傍に巳之吉が気を失って倒れているのを見付け介抱すると巳之吉は意識を取戻した。巳之吉は一人で森に出掛けるようになったが、ある年のある晩、森から戻る途中、旅している娘に会い、彼女が美しいので家に連れ戻った。娘は「お雪」と名乗り、やがて巳之吉の嫁となり、10人の子をもうけた。或る夜お雪は子供等を寝かしつけ、縫物をしていた。巳之吉はお雪を見つめながら「こうしていると18の時分に起った不思議な出来事を思い出す。あの時、お前のような美しい女を見た」と言うので、お雪が「その女の人のことを話して下さいな」と言うので、巳之吉はあの恐ろしい一夜のことを話し初めた。するとお雪はいきなり縫物を投げ捨て、立上ると「それは私だ。あの時若し一言でも喋っ

たらお前を生かしておかないと言ったであろう。だがこうして眠っている子供たちを見れば、お前を殺せようか。どうか子供等の面倒をよく見ておくれ」と叫び乍ら、お雪の体は溶けて白い霧となり引窓から消えて行った、と。

東京の青梅市にある「雪おんな縁の地」と刻まれた石碑によれば西多摩郡調布出身の百姓から聞いた話としてこの地域に上記に酷似した伝説の記録が発見されていると記されている。碑はJR青梅駅（中央線「立川」）より分れる青梅線より南東方向に下ること約1.5キロ、旧青梅街道より分岐された秋川街道が多摩川を渡る調布橋のたもと（左岸側）に横に寝ている。この辺りは東京の外れだけに緑が濃く、深い溪澗そのもの。多摩川も巾約5.60m、青く澄んで水勢もあり、下向の弧状桁で支えられた鉄製の橋から川面を見下ろすと2.30m位はあろうか。上流は雪女に相応しい感じ。

また前記の秋川街道の分岐点に近い、青梅街道沿いの「昭和レトロ商品博物館」という昔の商家風建物の2階に「雪女の部屋」。急な踏面の狭い木の階段を上ったところの約6畳の薄暗い部屋。早速大人の背丈大の雪女の出迎えを受ける。紙芝居風に、川辺沿いの掘立小屋の中に2人の樵（絵でなく小さな紙人形）が薪をくべた囲炉裏端で寝ている様子に始まり、白姿の女が年寄りの方に息を吹きかけている様子、・・・明かりのついた室で子供を寝かせ縫物をしている女とその傍で横になっている夫、立ち去った女を戸口で立ちつくして見送る子供連れの夫・・・と前述の武蔵の話によく似た筋に配置されている。伝説にまつわる図書や、この辺りの昔の写真等が所狭ましと置かれている。